

## 善のリストを検討する（その七）

伊集院 利 明

### 3-8-2 Me and My Well-being

ここで扱うのは、踏み込んだ検討というよりはむしろ対置である。と言うのは、Scanlon に対して私が対抗するための議論の基盤となるような論点はすでに前節までに論じたことの範囲の中に収まると思われるからである。

Scanlon の達成観がかなり、明確な何がしかを成し遂げるという成功モデル型の、言わばアメリカ的発想のものあまりかわりのないものになってしまっていることは、本稿の論点との一つの重要な対置点であるが、本稿にとってより重要なのは、それぞれの人にとってのそれぞれの目的がいかに重要になるかということについての問題関心である。最大の問題はこの問題についての Scanlon の追及心がそれほど旺盛には見えないことにある。上(その六)に英文で引用したところである。人が選ばざるを得ないにしても、その人が選んだということがその人にとっての重要性といかにむすびついて結実してくるのであろうか。選ばれたもののその人にとっての(固有の)大切さが、選ばれたものの worthwhile さだけで決まるわけではないことを Scanlon は前提していると言えるが、しかし、ならばどのようにして決まるのか、形成されるのか。

本稿 3-5 で論じたことは、エネルギー的的局面で私の生が私の生として描かれることに、達成が働くことにおいて、私の生の私のものであるものとしての価値が作られていくことを明らかにした。そして私の生が私の固有のものとして重要になるということはまた、達成と partiality 価値とのかかわりへも連動してくる。私にとっての私の子供の重要さと、私にとっての私の事業の大切さを全く同列に同種の構造のものとして扱うことはできないが、明らかに共通項はある。やや前節での論の繰り返しになるが、私にとっての事業の大切さはその事業自体の worthwhile さだけではない。私とのかかわりの history や人生における私の project 性など、私とその事業との間の固有のかかわりのうちの様々な要因が、そのものの私にとっての固有の重みを形作ってくる。

Scanlon にはこうした私の生の固有性、固有の像の形成のあり方の問題、そして特に partiality 的価値の問題についての関心が希薄に見える（本稿執筆時点（15年9月）で出版

されている Scanlon の 4 冊の本<sup>(1)</sup> のいずれの Index にも partiality の語はない)。これは単にこれを軽視したというだけのことでなく、むしろ人間にとって何が大事になって来るのかの価値の生成構造の重要局面の解明への志向の問題であり、もっと言えば価値全般のそうした構造連関解明への志向を欠くことで、諸価値を横並べにとらえらる問題である。そしてこれはまた well-being の重みの問題にも関わってくる。

Well-being の重みの問題を扱う前に、前段落までの記述がやや公平を欠くものであることにふれておかねばならない。というのも、Scanlon には、友愛などの価値を既に存在している静態的なものとしてとらえ、性質的に差はかなりあるものの価値として他の価値と横並べにおかれるようなものとして扱う記述が多く見られるものの、同時に、人間関係のあり方を価値のある種の源泉としてとらえ、そうした人間関係の機構の中に友愛をも組み入れて考えていくという、強い思考がある (Scanlon 1998 esp. 160-168)。こうした思考の力動性は、現実的人間関係や partiality 的価値を価値の生成機構の観点でとらえる本稿の路線を発展させていくために重要なヒントを提供する可能性を秘めているのではないかと私には思えるのだが、しかしそれでも、実際の Scanlon の論述は、partiality や現実的人間関係のあり方が扱いきれておらず、むしろ逆にそれに背を向けるようなものになってしまっていると思われる (そしてこれは、横並び的発想を招かざるを得ないように私には思える)。その不十分さについては、Scheffler 2010 (118-124) の議論が的確であるように思えるのでそれを要約しておく (Scanlon 型 contractualism の概要の知識がある程度ないとポイントがやや分かりにくいものになることをご容赦いただきたい)。 - - Scanlon は、道徳と友愛には同様の構造があり、相互的に認め合うこと (mutual recognition) の関係は、友愛の関係に比べてより非個人的とはいえそれと類縁的であるとする。この考えからすると、道徳的理由とは、相互に認め合うという関係 (これ自体が価値ある関係だが) に由来する理由、つまり関係依存的な (relationship-dependent) 理由であるということになるだろう。しかしこれでは実在的な (友人との) 関係と、あり得た関係とが区別なく扱われてしまうことになる。Scanlon はこの問題を意識して扱っているが、彼は real な関係と ideal な関係との区別に関わる面を十分に扱いきれておらず、相手が重要になるのが互いに認め合う関係の価値以外に存することがあり得るはずだということへの注意を払っていない。Real な関係においては、共有しあう history をもった人間同士の継続的關係が問題になる。道徳的理由において問題になるのは、現実に存在している関係ではなく、人間がどのように関係するべきかについての ideal でしかない (以上 Scheffler)。 - - 似たような不十分さは、選択の重要性についての Scanlon 1998 (251-256) の議論についても言えるように思える。選択の価値というきわめて重要な問題が主題化されているが、そこで Scanlon が道具的価値以外にあるとして挙げ

るの選択の価値は、representative value (選択が自身の好みや感情をあらわすものであること)、symbolic value (自身が自律的で主体的な大人であることをあらわすこと) というものでしかない。Scanlon は、これは選択が道具的価値以外の価値をもつことを示す例にすぎないとするが、それにしても選択が、エネルギー的側面とキーネーシス側面が相即する生の実態の中で自己像を作っていくことの重みから比べると、あまりにも弱い例に思える。

話を元に戻す。先に述べたように、以上の問題は、well-being 観と well-being の重要性のとらえ方にも直結すると思われる。もっと言うとも、partiality 問題等の軽視と well-being の重要性の否定は強く連動すると思われる。と言うのも、私は私の事業を私の事業として大切にすることからだ。私にとって私のすることが私のすることとして重みを持つ。人はそれぞれ程度の差こそあれそれなりにには自分の仕事には誇りを持ったり、自分の(何らかの意味での)「持ち場」(こうした発想はキリスト教的 Beruf の発想でなくとも例えば『ソクラテスの弁明』等に見られるように様々な形であるはずだ)なり、自分なりの生き方なり自分らしさなり「自己実現」なりを大切にすることになる。場合によっては趣味のようなものが大切になる。きわめてひどい腕前の将棋でも自分の趣味であるが故に大切になる。こういったことはまさに自分のものだから大切になるのであり、そのことが人にとってのその人の価値を作っていく。そして、こうしたものはそれなりにある程度の時間的幅において私の生の何らかの全体的あり方のうちに位置づけられることにおいて、私の生の善さを構成していく。であるからこうしたことが大切になる際は、かりに背景的にはあっても、私が、あるいは私の生自体が、何らかの意味で焦点になっていなければならない(例えば物事、事柄が focus となり、私あるいは私自身の生が sub-focus となるという形で)。まず well-being の明確な理解が生にあって、その上でそれを促進するかどうかを基準として選択がなされるという図式で考えるなら、たしかにそのような形で行動がなされることはほとんどないように思われる。そしてそうした図式を提示して批判の対象とすることは、功利主義などを検討するためにはきわめて重要なことであろう。しかし現実の生の中ではこの図式は一種の straw man のようなものと考えた方がよいと思われる。Well-being が重要になる仕方はもっと別のものがあり得るはずである。そして本稿は、well-being (像)とは個別的な場面での選択や行為とともに(もしくはそうした場面から)形成されていくものであるということ提起している。あること、ものが、自分のこととされることにおいて、そのこと自体が私の生の価値を形成していく。それが well-being として明確に主題化されているということではない。しかしそれはあくまでも私の営為としての私の営為とともにある私の生のことなのであり、少なくとも背景的にはそのようなものとしてとらえられるのである。このような形で達成は私の価値が私の価値として形成されることに関わっていることを浮き彫りにすることを本稿は努めてきた。もとよりこ

の形成の構造は、3 - 5 で課題とした価値の変様のあり方の問題や、partiality 問題の全体像等とともに はじめて解明されるものではあるが、しかし、私の事業が私のものとして大事である等々のことがそれ自体として私にとって重要となるという主張自体は、それ自体が説得力のあることであるものである以上、partiality 問題等への十分な取り組みを欠いた well-being 論は私にとっての生の価値についてのかなりの多くを抜け落とさせることにならざるを得ないのだということも、ある程度強く主張することができるはずである。そしてこうして見る限りでは、Scanlon の well-being を重視しない路線と partiality 問題等の取り扱いの不十分さは、別々の事柄ではなく、直結、連動したものと言えることになる。

本稿と Scanlon の相違点をまとめると、まず Scanlon が well-being の中で達成の果たす役割を重視している以上に本稿が重視していることがあげられる。達成は上に論じたような形での私のものとしての私の価値の形成の中核的機軸としてある。そして達成がなければ快もそれ自体としてはたいした価値を持たない。3 - 1 に整理されたような形で定式化される限りでの達成自体というものにたいした価値がないこともまた本稿の主張ではある。しかし本稿の 3 - 3 以降で論じてきたような達成となると話が全く別である。たしかに扱われてきたのは達成自体の価値と言うよりは、他のもの、他の価値との複合体 organic unity の価値と言った方が適切であるということは認めざるを得ないだろう。しかしそれが快楽を伴わない形であったとしても、快が単独である状態よりははるかに価値があるであろうこともたしかである。

第二の違いはより大きなもので、それは Scanlon が well-being を構成する諸要因を横並びにとらえる傾向を有することに対する本稿の異議申し立てである。これについて本稿の立場は前節までに示した。Scanlon は well-being は inclusive end のようなものとした (1998 (127))。Well-being が善いからその構成要因が善いのではなく、すでに善としてある要因によって well-being が構成されるとする。本稿はむしろ諸要因がそれぞれ違った役割、角度から善の構成に関わることを提唱する。達成は単なる価値の構成要因という以上に価値形成的である。達成は成功云々以上に私にとって何かが大切になりそのこと (自体) が私の生の価値になっていくことの方に重みがある。だから人生像というものも、自分が作った人生像が実現されて目標がみたされていくということよりも、人生像が漠然とした形であれ形作られていくことの方により重要性があると言える (漠然としたものでない方が好ましいということすら私は言わんとしていない)。それは個々の選択、行為に先立って (その場その場での先行であっても) すでに作られているというよりは、それとともに形成されていく。

- - Scanlon は welfare の増大を主眼とするような発想を批判したわけではあるが、inclusive end という言葉が使われるさいの発想というのは、善きものが詰まっている生を

思い起こさせるもので、この二つはある種の親近性すらあるという言い方もできるのかもしれない<sup>(2)</sup>。(トロイの木馬というような言い方をするときも同様である。) これは organic unity の問題とも関連している。袋の中に善いものが詰まっていると言っても、そのようなものどうしが結合することでより大きな価値を作っていく。問題は袋が、その中で合成反応が起こるような単なる袋ではないということである。私の生のことであるということを中心として起こる結合反応こそが問題だからである。袋のように扱われたものこそがその焦点的意味そのものなのである。

- - ちなみに、トロイの木馬についての本稿との立場の差を簡単に整理しておくと、トロイの木馬は敵軍を陣地に送り込むものだが、本稿の前節の方が、達成自体が敵軍的性格を強く持つことを言っているように思える。- -

本稿は well-being の領域を越した価値論全体についての Scanlon の論を検討するゆとりはない。しかし価値が多様であり扱いをそれぞれ異にし、一様にとらえられるものではない以上価値の理論といったものは構築しがたいと Scanlon 1998 (99) が言う際、この横並び的発想への傾向が見てとれることは確かなように思える。横並びを拒絶する本稿の論が、well-being の枠を超えて成立するかを本稿は論じることはできないが、しかし本稿の主張が正しいとすれば成立する可能性が大きそうにも見える。Scanlon は自分は理由を客観的に存在するものとする、それゆえ構成主義の立場には立たない、自分は Kantian ではないとする (Scanlon 2011)。私には実在論と横並び的発想が不可分なのかどうかは全くわからないが、1-5 で書いたように自分自身の長期的な見通しとしては構成主義的方向を少なくともかなりの部分は取り入れる方向を指向していることを書き添えておきたい。

最後に well-being に再びかえって、もう一つ述べておくと、well-being の軽視は、第2節で検討した (特に 2-10) 快のあり方にもそぐわないように思われる。快はその場の物事へと、それらの価値へと我々を差し向けるが、同時にそれを自分の生全体のこととして感じさせる。このセクションで私が well-being について示した方向性、つまり、個々のもの事、営為、事業が生の中でそれとして重要でありながら、私の生のこととして問題となることに、well-being 価値の形成の中核を見てとる方向性は、こうした快の構造に即している。もちろん快は episode 的なものであり、2-7 で見たように happiness へのあざかり方も間接的である。快において生の全体が問題になるとしても、その時々のもものにすぎない。それでもそれは積み重なって根本的気分の形成に関わるし、そもそもが快はあくまでも様々なものと有機的統合性を作ることに (ではあるとは言え、それによって) 大きな価値を形成する。そして well-being を軽視することそのものが、我々が事物との関係において同時に自分の生を問題にすることを軽視することであり、それはまた、物事をよく感じ (feel good (2

- 10 参照)) 自分の生をよく感じるということ自体の根本的構造にそぐわないと言うことができよう。よく感じることは私にとって重要なことであり、私の well-being に重要なことである。feeling good is good for me and my well-being.<sup>(3)</sup> だから先に注の中でふれた Arneson 2002 の論文タイトルをもじって、次のように言うことが適切であると思われる。  
The end of the well-being as we know it? ----- No, I don't feel fine!

### 3-9 まとめ

達成を成功モデルで狭くとらえるのなら達成はそれ自体ではたいした価値を持たない。達成の生における重要性を考えるためには、達成を広い意味に考えねばならない。達成は生のキーネーシスの側面とエネルギー的側面の連動する場において、そして個的なものとのかわり、私のプロジェクトが関係の歴史において引き受けられ私の生のこととして重みを持つ局面において価値の生成を構成し、生の形を私のものとして作っていくと思われる。こうした達成は well-being の中核にありながら、かつ well-being 的でない特質を持つ。価値はこうした流動性、ダイナミズムにおいて、生成の相において考えるのが妥当であるように思える。価値を静態的に横並びにとらえることは、危険である。

## 4 その他の項目、およびとりまとめ

### 4-0 いくつかのことわり (あるいは釈明)

第4節では well-being を構成すると (少なくとも客観的リスト説論者には) 思われるその他の項目を取り上げ、比較的簡単に検討して (4-1~4-4) から、本稿全体の成果を取りまとめる (4-5)

快、達成に対して、他の項目の検討が比較上かなり簡略なものになるが、弁解のためにその理由を述べると以下のとおりである。

私の体力的限界の問題はさしおいて、重要な理由として、善きものと思われるもの間の構造連関について考察をしないで済ますことに対する異議申し立てという本稿の主旨のためには、快、達成を中心に論じることでそれなりに説得力が十分得られるということがある。もう一つには、愛、知をのぞくものはリストに含めるか否かでリスト論者の間で選定に差がある。そのため論点の説得力を強めるという目的と、労力との関係を考えると、こうした項目の検討に時間、紙幅を割くことはわり (CP) が悪い。

愛、知、道徳についてはそれぞれに固有の事情がある。

徳、道徳については、本稿にとって特に重要になるのは well-being という価値領域のリス

トにそもそも含めるべきかという問題であり、これは well-being という価値と他の価値との関係という本稿で扱うにはあまりにも大きな問題になる。本稿は達成に関してこれを論じたが、しかしそれは、達成という明らかに領域内にあると思われるものを扱ってその領域の不安定さが大きいことを示すことが問題であったのであり、徳、道徳の場合とは事情が異なる。Well-being とその他の諸価値との関係については別稿にて追及したい。

知については研究遂行上の現実的問題が大きく壁になる。本稿はあくまでも現在段階での学界の議論状況を踏まえてそれに対峙することを路線とするが、知の価値について学界で主に議論されているのは、いわゆるメノン問題（真なる想念に対して知の価値が大きいといかにして言えるのか）という認識論畑の問題であり（Bradford 2015, Pritchard 2014）、その中で論を進めることは困難である。（つまり本稿の方針は既に存在している相手に戦いを挑むことであるのに、ここには相手がいない。）

愛については主には個人的な理由である。 - - 愛に関しては私はそれなりの長さになる独立した別稿を予定しており、愛のなんたるかとその価値についてはそこで本格的に論じて行く予定である。

#### 4 - 1 愛的関係、愛

ここで取り上げるのは、本稿に重要なかわりのある範囲に限定する。

まず、愛が重要なのか、愛的関係が重要なのか。

関係が重要だという考え方については、どうしても問題になるのが、関係自体に intrinsic な価値があると考えるのが不自然に思えるという問題（Keller 2013 (45-77)）である。日米関係は相互の利益になる（と言われる）関係であるが、相互の利益のためだけでなく関係自体に intrinsic な価値があるという関係というものがあるであろうか。友愛等は何かのために作られたわけではなく、双方の利益をもともと狙って作られた日米関係とは違うと言われるかもしれない。しかし関係において重要なのがまずそれぞれの関係項であるということ自体は動かしようがないように思える。愛的関係が相互にとって重要であることは言うまでもないが、well-being の要因としてまず問題なのは intrinsic な善であるが、愛的関係の価値を道具的に考えるならばそれは快や達成の善を生み出すことのためにように思えてくるだろう。（もう一つ、文化的相対性を考えると関係が理由になるかが問題であるという批判もあり（de Sousa 2015 (72-73)）これももっともだろう<sup>(4)</sup>。）

では愛的関係でなく、愛、つまり、愛する双方にある何かが重要であるとしよう。それならばその何かとは、つまり、愛とは何なのか。感情か、欲求か。（この二つが学界での標準的な候補である。ただし欲求説は先に紹介した Frankfurt 2004 の説であり、標準説の一部

というにはやや問題があるかもしれない。)しかし欲求にしる感情にしる、それ自体では価値がないように思える。また、愛は、快をその本質的構成要素とする立場がある (Badhwar 2003) <sup>(5)</sup>。快を重視する論は、多くの人の愛についての直観と合致するものだという意味では説得力のあるものだと言えよう。しかし、快についてはそれ自体として見た場合に大した価値がないことを確認してきた。感情に価値があるとしてもそれは快と似たような事情を抱えることになるだろうし、欲求にまつわる問題は第2節で態度説にまつわる問題を考察してきたところで追及してきた。

もちろん、愛は、感情、欲求、快というものの自体として貴重なものではなく、まさに愛として貴いのだ。愛において私は、特に他者との関係を大事にし、それを我がこととすることで、そうしたこと自体を喜びとし、それがまさにそのような形で、partiality 的に重要性を持つということ、私の well-being の一角としていく。しかしこうだとすると、まず第一に、愛というのは、あるいは愛の価値は、快や達成やその他の項目、あるいはそれらの価値から構成される、複合体であり、そして、愛が重要だという (正しい) 主張は、それ自体が本稿が問題にしてきた organic unity の主張を裏付けることになるだろう。愛の快は愛の快であるが故に貴重なものであり、その価値は加算計算でできるようなものではない。第二に、愛と価値との関係についての上述は、達成と価値との関係の事情にかなり近い。「上に見た事情」と書いたものの叙述は、かなりの程度、ペプシ問題と partiality 問題を扱った際の叙述をなぞったようなものになっている。達成を本稿では、何かを明確に仕上げることというよりもっと広い意味にとらえることを提起した。そうした意味での達成は、第3節で考察したことによれば、well-being 価値、および価値全般にとって重要であるが、しかし他と横並びにあるよりは価値の生成そのものの在り方を構成する構成機構の一翼のようなものとして重要であるように思われた。であるなら愛についても事情は同じである。愛は価値の部分というよりは、我々の生の価値が生まれてくることそのことに (道具的という形ではなく) 関わるものとしてとらえる方がよいのではなからうか。そしてこれは我々の直観、実感からすれば、むしろ当たり前に見えるようなものではなからうか。 - - ちなみに愛自体と達成自体はもちろん別であるが、愛には達成と性格上のある種の親近性があることが、2 - 4 の論により既に示されている。図表において well-being の構成要素で達成以外のもののほとんどが達成とは対照的であったのに対して、愛だけは (やや) 達成よりの傾向を示していた。

## 4 - 2 知

知については上に述べた学界の事情の問題と私の能力の問題が加算以上の効果を及ぼして

いる。それでもいくつかの議論をしておくことはそれなりに可能だし、必要であるように思える。

- ・2-2-3で、快が善であるとする、死というものがあまりにも大きな損失であることになりすぎるという問題を取り上げた。知についても、どんな知も知自体としてよい(Hurka 2011 (75-96))のだとすると、同様な問題が生じる。死は生の善を奪う消極的な悪と考えられるが、かりに、宇宙が永遠に続き毎日何らかの(一定のパターンにはまらない)変化が起き、それをずっと観察できるのなら、死は無限の善を奪ってしまうことになるだろう。かりに、熱力学の第二法則やダークエネルギーの理論だのが正しいとしても、宇宙が素粒子だけになってしまうまでにかかる年数が100億の100乗ぐらいだと(その間に科学の見聞も変わってしまうかもしれないが)言われているそうなのだから、積は莫大な量になる。たいていの人は死というものをそれほどにまで悪いものだと思っていないのではなかろうか(ネーゲルだの私だのは少し違うかもしれないが<sup>(6)</sup>)。
- ・どんな知にもそれなりに善があるかもしれないが、注意が必要なのは、我々が知の価値だと思っているもののうちのかなりの部分が、知自体のintrinsicな価値ではないかもしれないということである。Hurka 2011 (75-96)は、知を世界、外界を知ること、自身と外界との関係について知ること、自身の内的状態について知ることの三つに分けて論じているが、このうちの2番目の知の価値だと思われるかもしれないものは(2-5の注で論じたように)ほとんどの部分が世界の現実の(本当の)あり方と関わっていくことの価値(のための手段的価値)として説明されるべきものであろうから、この知にそれ自体でのintrinsicな価値があるにしてもそれがそれほど大きいものであると考えるべきではないであろう。第1の知は科学的知等を含むが、これについてCrisp 2006なら(達成の価値を貶めようとする彼の議論を2-4で批判的に検討したが、それを応用拡張して考えてみると)知が快の役に立つので、知がそれ自体で善なのだと思い込んでしまった方が快を得るのに有利なので、進化の過程において思い込みが生まれたというような論を展開するかもしれない。こうした論法に対しては重大な疑念が生じるということをも2-4で論じておいたが、しかし、一方で知には快とは異なる知に固有で独特の事情がある。知はかなりholisticな性格を持つものなので、役に立ちそうにはとても見えないようなものが全体的連関において有益性に連関するということがある。どんなものでも知は知として重視するという態度を我々がもたないと、知はその道具的力を十分に発揮できないかもしれない。こうした事情がある以上、我々は科学的知の価値について考える際、道具的価値とintrinsicな価値が自分の頭の中で明確に区別できているかをもう一度見直して、さし引いて考え直さねばならないであろう。しかしこうした区別というのはひょっとしたらかなり

困難なのかもしれない。例えば、観葉植物の観照的価値と、光合成で酸素を出してくれるありがたさ、また、ヴァイオリニストにとってのヴァイオリンの演奏会でよい音を出してくれるという価値と親の形見としての価値、等々考えてみるとかなり困難なようにも思われる。こうしたことを考えると、知の intrinsic な価値というものは我々が漠然と思い描いているよりもかなり小さいのかもしれない。

- ・上の二つを総合して考えてみると、知についても organic unity の考えが成り立つように思える。

#### 4-3 道徳、徳

先にも述べたようにこれは well-being と他の価値との関係についての総合的問題構造に直結するものであり、本来はきわめて大きな問題である。この段階で本稿の主旨にとって有益性が高いと思われることに限定して扱う。

- ・道徳の価値と well-being との関係の扱いの学界の状況は混沌としていると考えてよいと思える。

道徳についての議論は well-being のそれなどに比べて学術的に体系立っており進歩があるとみなされている。三大説の区分を中心として体系的な理論が構築され相互の応酬も活発に行われている。しかし価値の全体における位置づけとなると別である。道徳そのものの価値を廻って、善意志こそが無制限に善とみなせる唯一のものであるとするカント（「最高善」には幸福も含めているが）や、徳を中心とする形で well-being をも体系づけてしまう Slote2001 がいる一方で、徳は二次的善にすぎない（二階のもので、一次的な善より価値が低い）とする Hurka<sup>(7)</sup> のような論者もある。これはかなり極端な対立であるにもかかわらず、このことについての議論が活発とは見えない。また、善リスト説論者の中で、徳、道徳は含まれていたりいなかったりする（その割に大きな論争になってはいない）。そしてとりわけ重要なことだが、近年徳倫理学に好意的な学者たちが well-being（や happiness）に対する道徳の重要性を頻繁に説いている<sup>(8)</sup> が、well-being の諸説を展開する研究と徳倫理学の研究がかなりの程度に没交渉的と言える（1-2 で取り上げた Slote の試みが well-being 学説業界において着目されることもほとんどない）。1-4 に見た Haybron の指摘のように、well-being をそれとして、つまり功利主義の welfare 論の継続として、あるいはアリストテレス的倫理学の枠組みの中での eudaimonia としての扱いといったような言わば外から与えられた枠組みを離れて、追及するということは、とても十分とは言えない。Well-being が well-being として研究されると今度はまた well-being の価値全体の中での位置づけの考察がないがしろにされがちになる。道徳と well-being との関係が難しいのは、事柄の問題と並ん

で、学界の学問のあり方も関係しているのかもしれない。

- ・すぐ上で、well-being 諸説の研究と徳倫理学が没交渉であると述べた。Well-being 諸説の研究でどれほど徳倫理学が扱われているかについて、ごく簡単な、小学生の夏休み自由研究的な（と言っては小学生に対してかなり失礼なほどのごく簡単な）調査をして見たが、実際にほとんど扱われていない。詳細は注にまわす<sup>(9)</sup>。
- ・取り扱いを難しくしている要因の一つに我々が行動の際、何のどのような価値を重視しているのか、どういう価値が理由となっているかが自分自身にもそれほどはよくわからないということがあがることであげられるように思える。例えば Hare は why be moral 問題について、親が道徳的価値などを全く考えずに、自分の子の利益だけ考えて（つまり子供の well-being だけ考えて）子を育てるとしたらどう育てるかを考えてみるとすると、結局のところは、道徳を道徳であるがゆえに大切にするような人間に育てることが、もっとも得策になるとする（Hare 1981 (281-307)）。その子の well-being だけを純粋に考えることができた場合に本当に得策と言えるのかはここでは扱わないが、それにしてもこの話を聞くだけでも、well-being だけを考えるということが可能なかが疑問に思ってしまう。これは Hare の議論の説得力に関わるかもしれない。というのも、我々の側で子供の well-being のことだけしか考えない親のことを想像することが本当にできているのが問題になるからである（この問題は Feldman 2004 (9-10) にも指摘されている）。例えば、子供にある宗教を信じさせようとするとき、その宗教が子供の well-being に確実につながるといふ思い（こみ）+その子の well-being への（専一的な）追求というのと、その宗教自体に対する価値観が、区別できるのであろうか。また別例で、会社倒産の瀬戸際となって（客観的に言って）このままでは自分の生活が逼迫するという状況で、会社を立て直すために尽力するとき、どこまでが自利のためでどこまでがそれ以外の理由もしくは動機での行動と言えるのであろうか。そしてこれは単に我々の心理が、動機の区別がわかりにくいようにできている（このことについての心理学等の研究を私は知らないが、これは多分そうなのであろうと思う）だけの問題というよりは、価値の境界というもの自体があいまいであるということ、もっと言うと、(Scanlon が言うように) 境界があいまいであるということだけではなく、(本稿が追求してきたように) もっと重い事態であるがゆえであるということが考えられるだろう。

#### 4-4 その他、他

リストの候補になるものとしてほかに、happiness、健康、自律性、美的芸術的なものの享受等がある。

正直に言うところらについて現段階であまり判断できる力、余裕があるとは言えない。Happiness、健康が単に道具的に善いものではなく、intrinsicに善いと言えるのか、自律性を含めるのはあまりにも文化的バイアスのかかった見方ではないか（孔子なら礼を入れるはずだ（Rice 2013 (210)）などなど、様々な問題がある。

本稿の重要趣旨に関わりがある問題についてのいくつかを取り上げておきたい。

- ・リストが確定しにくいこと自体が、本稿の主題の裏付けとなるであろう。そもそもリスト説自体が何らかの原理をてこにしないとリストが作りづらく、下手に強い原理を導入するとリスト説のリスト説としての意味をなくしてしまいかねない。一方で、Rice 2013 (110)の言うように直観や“people’s considered judgement”に頼ることは文化的バイアスのかかったリストを作り上げてしまう危険につながりやすい。本稿は構造連関の考察の主題化の必要性の主張をする。本稿は基本的にはリスト説の枠組みに疑念を投げかけていく態度を取る。リストの安定性がないことは、リスト成員間の関係構造に複雑さがあることの反映であると考えるのは自然なことであろう。
- ・一方で、本稿の論は文化的バイアスの問題をかなり緩和しているように思える。文化的バイアスの問題として批判をよく受けるのが自律性である。もちろん文化的バイアスの疑念提起は、疑念の表明以上になるような性格のものではないかもしれない。例えば、AがB時代の産物であるということは、事実問題であって、Aの価値を再考させるための機縁、動機を与える働きはしても、それ自体ではAの価値を低く考えたりその普遍性を否定したりせねばならないことの決め手となる論拠にはならない（と考えるのが哲学の世界では常識である - - かりに奴隷解放の思想が戦争において一方が勝つために戦略的プロパガンダとして作り上げたものにすぎなかったとしたらどうかというような例を考えてみれば一目瞭然というわけである）。それでも、今述べたように、方法論が直観に依存している場合は、相対性の指摘はかなり有効な判断材料になるはずだ。そして、例えば達成に関してこれがあまりにも「先進国的」すぎる価値観かもしれないということは、3-3で挙げたアメリカ人とアルゼンチン人に対するアンケートの回答のあり方などを見ればかなり強い疑念をひきおこして当然である。本稿は達成のとらえ方をかなり広く拡張している。それは必ずしも顕著な何かや明確な何かを成し遂げることではない。日常的な、何をやったとも明確化できないような、現実とのかかわりにおいて生きるあり方を幅広く含んでいる。これは言わば人間の生の基本的構造のように思える。- - ただし本稿のこの拡張の主張は、（文化的相対性の疑念を追い払うことによって）リストを安定化させるようには働かない。このように拡張したうえでなお、その価値を主張することは、第3節で論じたように、達成を他と横並びに見るよりもむしろ価値の生成そのものにかかわるものとして見ること

によってだからである。

- ・美的芸術的享受があげられることについて一言だけ述べておきたいが、それは第3節すでに論じたことのほとんど繰り返しにすぎない。美的芸術的価値にかかわるものが well-being の構成契機とみなされるべきことに関しては本稿の路線は異存がない。しかし、「享受」「観照」と限定しては狭すぎるし、また、美、芸術というものを well-being や道徳などの他の価値から独立性を持った独自のものとするならば、「美的芸術的」のとらえ方は狭すぎるものになると考える。理由と内実は第3節で述べたので、繰り返しは避ける。
- ・本稿の立場からすれば、何がリストに入るかについて厳密に規定することはそれほど意味がない。本稿は、様々な要因がそれぞれ異なる形で関係しながら価値の生成とでも言うべきものの統一的機構を作り上げているのではないかということ提起する路線を築いている。当然その機構の中では様々な要因が関わってくるだろうし、それぞれのかかわりの機能の仕方に大きな差があるはずであるだけでなく、かかわりの程度も異なるであろう。たとえば言うなら、あるものは中核を占めあるものは周辺を占める。どこまでを機構自体の範囲として扱うかを限定して考えることにほとんど意味がなくなるかもしれないということは十分に考えられる、いや、かなり可能性が高いであろう。
- ・リストに載せられることがあまりないものに、人生の意味、integrity、shape of life 等がある。これらのうちの人生の意味についてふれておく。

まず、意味という価値があるとすると、意味が well-being にとってかなり重要なものであることを疑うことはばかげているように思える。一方で意味は well-being とは 3 - 4 で論じたように別の価値と考えられる。道徳の場合以上にこの価値の領域混淆が価値の体制、構造の流動性やダイナミズムを示し、横並び的発想に疑念を投げかけるものがあることは明らかである。

さて、第3節の論は人生の意味というような問題が問題としてあるのだということを学界の現状によりかかって前提して話を進めてしまった。哲学のアカデミズムの世界において生の意味の考察はいつの間にか哲学の一分野としての位置を占めてしまっている感がある。しかし客観的視点に立つ限り、王様は裸ではないかと疑う必要があるのではないかとすることは十分に考えられると言わざるを得ないように思われる（同時にこれは、現状では多くの人（と言っても学者）が王様は服を着ていると思っているということを事実認識としては前提にすべきであるということではある）。公平に言って Metz 2013 に対抗するような内容とヴォリュームを備えた書物が現れた段階ではじめて「少し学問らしくなってきた」と評すべきではなかろうか。（脱稿の2015年9月の段階では私自身はまだそうしたものの存在を知らない）。大きな問題として、「意味」の意味がはっきりしないことがある（ちなみに Metz 2013 (34-36)

は「意味」の意味を一つに限定しない pluralism を提唱するが、これは悪く言うと居直り理論のように見えてしまうかもしれない)。また意味の研究者たちは世の中の多くの人が意味を重視しているということを前提視してしまっているが、意味が重要性を持つのかということ自体が問われねばならないはずである。 - - ちなみに学問の縦割り状況（それはある意味では必要だし重要なことであるが）の中ではこうしたことは起きがちになる。例えば死についての哲学研究者たちはどうも多くの人は死を恐れているのだと思い込んでいるようだが、それが思い込みにすぎないことはアンケートでもとってみればすぐわかることだ（それとも私が学生相手に取ったアンケート結果は日本特有の現象なのだろうか<sup>(10)</sup>）。さらにこの縦割状況では、一つの分野の存在認可の可否自体がその一つの分野の中で扱われてしまう危険がある。（さらに言えば例えば *Stanford Encyclopedia* のエントリーになることだけで認可されたものと扱われてしまうような状況であることも簡単には否定しにくい。）

生の意味については稿をあらためて本格的に論究する予定であるが、多少弁解めいた説明を加えておく。

第3節で達成がかなり様々な点で自分の人生の価値になっていくことを論じ、価値の生成性を論じた。とりわけ partiality 的な価値がそこでは問題になった。私としてはこうしたことが生の意味ということを考える上で最も定位されるべき場であると、現在のところ考えている。これは、自分の生をどのようなものとしてとらえるかというとらえ方に関わる。ただし、生の意味という価値は一生を通しての全体ではじめて決まるというものでは必ずしもない。例えば人生の最後の日で、オセロで最後の一手でほとんど黒だった全体が白にひっくりかえる等ということを生で考えるべきではない（と、多くの学者とともに私は考える）。人生の価値一般も意味も、人生のそれぞれの局面において宿り得ると考えるべきであるという立場を私は取る<sup>(11)</sup>。それでも少なくとも生の意味の方は決して episode 的にあるものではなく、ある程度の幅、単位において私が私の自身の生を理解することにおいてある（生の意味は客観的要因だけで決まるか、それとも主観的要因も必要かという対立軸においては私は後者の立場を取る<sup>(12)</sup>）。私は自分の生について何らはっきりした理解などしていないと言われたら、それは3-3で取り上げたアルゼンチンの学生が達成などと気にしていないと答えるのと同じだと答えよう。生の理解というものはかなり幅広い形でとらえることが可能であるとしたい。

生の意味というものを、もし、このような角度から追及していくことができるとするならば、生の意味と3-5~3-7の論との関係も特に奇異なものとは言えないであろう。そして意味は well-being の構成機構にとって、そしてそれだけでなく生に関する価値の全体においてかなり重要な役割を演じることになるし、また well-being の境界もますますぼやけるこ

とになるだろう。

#### 4-5 総まとめ

本稿の主旨、成果をこの段階でまとめ直すことは、本節が本稿全体の中では補説的な性格のものであった以上、第2節と第3節のそれぞれの節のまとめに記したことの實質上の繰り返しになってしまうだろう。つまり、well-beingの構成要素がそれぞれ単独でそれ自体として見られる限りは大した価値を持つように見えず、それらを単純に加算して考えるだけだと計算が合わなくなること、organic unityが形成されていると考えることが自然であること、快、達成のwell-beingファミリーの中でのそれぞれの別の面での特異性、とりわけ達成の特異性、そして、二つがそれぞれ別の形で、単なる構成要素としてというよりは、価値の形成、生成に力動的にかかわること、特に達成においてそれが著しいように思われること、といったことを、多少詳しく、またレトリックをまじえて語ること以上にはならないだろう。それゆえ、そうした表現の労力を省略させていただくという表明をそうしたレトリックのかわりとさせていただきたい。

最後にこれをもう少し補う意味を兼ねて、well-beingの客観的リスト説に対する本稿の離反点のあらましを提示し直しておきたい。本稿は客観的リスト説を批判すること自体を主目的としているものではないが、客観的リスト説との関係は本稿の議論展開の軸になっているので、上の提起のポイントを分かりやすくするためにも、ここでそれをやる有益性が高い。同時にこれは實質上Scanlonに対するスタンスの整理にもなる。理論上の要点は上に提示したことに含まれているので、やや比喩的な形で、私が強調したい面に光を当てておきたい。

私はなるべく統一的な構造的な説明を志向したが人間なのだが、しかしそれは言わば個人的な嗜好のようなものと言ってよい。公平に言えば多元論者であること自体は何ら問題がない(e.g. Rice 2013 (204))と考えるべきである。しかしそれはあくまでも、それ自体ではということである。例えばある特定の製品を作る会社が三社、A社、B社、C社とあったとしよう。消費者である私から見るとこの三社が独立していて競争しているように見える。その割には値段が高い気もするし、また新しいものがそれほど開発されていない気もするのだが、三社は独立した会社で相互にライバル関係にあるように見える。しかし本当のところは裏で一人の資本家が三社を操り、競争しているように見せかけて独占的利益をむさぼっていて、消費者である私にはそれが隠されている。 - - 少しぐらい値段が高めでものが悪いというだけで、事態がこうなっているのではないだろうかと疑うのも健全ではないかもしれない。しかし三社が明らかにかつ露骨に怪しげな動きをしているのに全く疑わないとしたら、それは消費者としてはおめでたすぎるであろう。

もう一つの方向から光を当てると、客観的リスト論者が言っていることは、次のようなことに近いのかもしれないということである。おいしい宇治金時のかき氷を出してくれる店があるのだが、このかき氷のおいしさを構成しているのは、氷とアンコと碎氷機と名人的腕前のTさん、等々である。 - - 本稿の議論によって、単に横並びに考えるだけでは問題で、構成要素とされているものが実際にはこのように働き方、構成の仕方に大きな相違を抱えているのかもしれないという方向側へとある程度は理解の仕方をずらしていかねばならないということは言えていると思うが、正しい理解は横並びよりはそうした理解の仕方の方に近いということまで論じられているとは言えない。私自身は今後、これにかなり近い路線を展開していく予定である。(以上)

付記 本連載は、(その七)までの全体が2015年9月に完成され投稿されたものである(投稿規約による)。

## 注

- (1) Scanlon 1998, 2014 と、*Moral Dimensions* (2010) と *The Difficulty of Tolerance* (2003)
- (2) Scanlon は teleology を批判しているが、そもそも teleologist は teleologist としては価値の多様性を認めていけないわけではない (Arneson 2002 (318))。
- (3) 十分条件 (good enough for me and my well-being) でなくともおそらくは必要条件にかなり近いものであろう。
- (4) ただしその文化、時代ごとに優先される関係が重要になるという考えは、それ自体としては、あっておかしくないのかもしれない。
- (5) 私は、快を伴わない愛が理論上あり得るか否かを考察することは、愛のなんたるかを考える上でかなり重要なことであると考えている。
- (6) とは言え私自身はネーゲルのように生自体が善いと思っているわけではない。
- (7) Hurka 2011 (119-139) これは *Hurka Virtue, Vice, and Value* 2001 Oxford に展開された考えをまとめたものである。
- (8) e.g. Badhwar 2014
- (9) well-being 諸説研究側で選んだのは、本稿のここ以外の個所で言及の対象として用いられた文献(つまりこの調査だけのために文献表を増やすことはしないことを方針とする)で、かつ、well-being の諸説検討あるいは一定の説の主張や提示を行っているもの(つまり、快や達成などの特定の局面だけを扱ったものは外す)に限定した。その結果選ばれたのは、Crisp 2013, Fletcher 2013, Keller 2009, Raibley 2013a, Raibley 2013b, Rice 2013, Sarch 2012, Tiberius, Plakias 2010 である。その上で、しばしば「私は徳倫理学についてはあまり勉強していないので、読んでいるのは Hursthouse, Slote, Swanton の三冊だけです」というような言い方を学者がするというところをかんがみて、この三人の名前が、それらの well-being 学説研究文献にどれだけ登場するか調べてみる。結果は、Rice 2013 に Slote の名が1回でてくることを除けば他にはまったく言及がない。実は well-being 文献から Badhwar 2014 を意図的にはずしておいた。これは明確に徳倫理学サイドからの研究だからであり、これには実際に三人の名前がかなり頻繁に登場する(ここまで書いてはじめて、本稿自体が Slote 以外に言及していないことに気づいた)。ちなみに徳倫理学のいまの三人のそれぞれの主著に、Griffin, Sumner の名がどれほどあらわれるか見てみると、

Slote, Swanton に Griffin が 1 回ずつでてくるだけである。

- (10) 面白いことに哲学専攻の学生相手にとると年度によってかなり大きな差が出る。
- (11) ここら辺は様々な立場があり、本来ならばここでの論述の一步一步で学術上の位置づけをしめしていくのが筋だが、ここでは概略的な方向性と本稿の狙いを示すことが目的である。
- (12) ちなみにこのどちらの立場も、この分野では「客観説」と呼ばれるものの中に収まる。

## 文献

連載その一～その七で言及したもののすべてを掲げる。間接的言及等は除く。また翻訳を使用した場合も、著作年は原著の発行年を記し著者名も原語で記す（分かりやすさへの配慮のため）。

- ・ Arneson R. 2002. The End of the Welfare as We Know it ?. *Social Theory and Practice*, 28, 315-336.
- ・ Aydede M. 2000 An Analysis of Pleasure vis-a-vis Pain. *Philosophy and Phenomenological Research*, 41, 537-570.
- ・ Badhwar, N. 2003. Love. in H. LaFollette (ed.), *Practical Ethics*. Oxford. 42-69.
- ・ Badhwar N. 2014. *Well-being*. Oxford.
- ・ Bradford G. 2013. The Value of Achievements. *Pacific Philosophical Quarterly*, 94, 204-224.
- ・ Bradford G. 2015. Knowledge, Achievement, and Manifestation. *Erkennnen*, 80, 97-116.
- ・ Bramble B. 2013. The Distinctive Feeling Theory of Pleasure. *Philosophical Studies*, 162, 201-217.
- ・ Brax D. (=Bengtsson D.) 2003. The Intrinsic Value of Pleasure Experiences. *Lund Philosophy Reports*, 2003, 29-61.
- ・ Brax D. (=Bengtsson D.) 2009. Hedonism as the Explanation of Value. Lund University.
- ・ Crisp R. 2006. *Reasons and the Good*. Oxford.
- ・ Crisp R. 2013. Well-Being. *Stanford Encyclopedia of Philosophy* .revised. 2013.
- ・ DeBrigard F. 2010. If You Like it Does it Matter if it's Real ?. *Philosophical Psychology*, 23, 45-57.
- ・ deSousa R. 2015. *Love*. Oxford.
- ・ Drewe S. 2003. シュリル・ドゥルー. 『スポーツの哲学入門』. 川谷訳 (訳は 2012). (原著 *Why Sport ?*. Thompson.)
- ・ Dunbar R. 2012. *The Science of Love*, Farber and Farber.
- ・ Feldman F. 1997. *Utilitarianism, Hedonism, and Desert*. Cambridge.
- ・ Feldman F. 2004. *Pleasure and the Good Life*. Oxford.
- ・ Feldman F. 2010. *What is This Thing Called Happiness ?*. Oxford.
- ・ Fletcher G. 2013. A Flesh Start for the Objective-List Theory of Well-Being. *Utilitas*, 25, 206-220.
- ・ Frankfurt H. 2004. *The Reason of Love*. Princeton.
- ・ Griffith P. 1997. *What Emotions Really Are*. Chicago.
- ・ Halwani R. 2000. *Philosophy of Love, Sex and Marriage*. Routledge.
- ・ Hare R. 1981. ヘア. 『道徳的に考えること』. 内井他訳 勁草. (訳は 1994) (原著 *Moral Thinking*. Oxford.)
- ・ Haybron D. 2008. *The Pursuit of Unhappiness*. Oxford.
- ・ Heathwood C. 2006. Desire Satisfaction and Hedonism. *Philosophical Studies*, 128, 539-563.
- ・ Heathwood C. 2007. The Reduction of Sensory Pleasure to Desire. *Philosophical Studies*, 23-44
- ・ Helm B. 2001. *Emotional Reason*. Cambridge.
- ・ Helm B. 2002. Felt Evaluations. *American Philosophical Quarterly*, 39, 13-30
- ・ Helm B. 2010. *Love, Friendship and the Self*, Oxford.
- ・ Hurka T. 1993. *Perfectionism*. Oxford.

- ・ Hurka T. 2006. Games and the Good. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 106, 217-235.
- ・ Hurka T. 2010. Asymmetries in Value. *Nous*, 44, 199-223.
- ・ Hurka T. 2011. *The Best Things in Life*. Oxford.
- ・ Jollimore T. 2011. *Love's Vision*. Princeton.
- ・ Kagan S. 1992. The Limits of the Well-being. (in Paul et al. eds *The Good Life and the Human Good*. Cambridge. 169-189)
- ・ Kagan S. 2012. *Death*. Yale.
- ・ Katz L. 2006. Pleasure. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. revised 2006.
- ・ Katz L. 2008. Hedonic Reason as Ultimately Justifying and the Relevance of Neuro Science. (in W. Sinnott-Armstrong ed. *Moral Psychology, vol.3, The Neuroscience of Morality* .MIT. 409-417.)
- ・ 川原栄峰. 1977 『ニヒリズム』. 講談社.
- ・ Kekes J. 2014. *How We Should Live*. Chicago.
- ・ Keller S. 2004. Welfare and the Achievement of Goods. *Philosophical Studies*, 121, 27-41.
- ・ Keller S. 2009. Welfare as Success. *Nous*, 43, 656-83.
- ・ Keller S. 2013. *Partiality*. Princeton.
- ・ Kolodny, N. 2003. Love as Valuing a Relationship. *The Philosophical Review*, 112, 135-89.
- ・ 小泉賢吉郎. 1997. 『科学技術論講義』. 培風館.
- ・ Korsgaard C. 1996. コースガード. 『義務とアイデンティティの倫理学』. 寺田他訳 (訳は 2005 年) 岩波. (原著は *The Sources of Normativity*. Cambridge.)
- ・ Mackie J. 1977. マッキー. 『倫理学』 加藤他訳. (訳は 1990) (原著 *Ethics*. Penguin.)
- ・ Metz T. 2013. *Meaning in life*. Oxford.
- ・ Moen O. 2013. The Unity and Commensurability of Pleasure and Pains. *Philosophia*, 41, 527-543.
- ・ Morgan S. 2003. Sex in the Head. in Power N. et al. eds. *The Philosophy of Sex*. 2013. 101-139 (originally *Ethical Theory and Moral Practice*, 6, 2003. 373-410.)
- ・ 村田純一. 1994. 技術の哲学. (『岩波講座現代の思想 13 テクノロジーの思想』. 3-44.)
- ・ Nagel T. 1979. ネーゲル. 『コウモリであるとはどのようなことか』. 永井訳. 勁草. (訳は 1989) 原著は *Mortal Questions*. Cambridge.
- ・ 中江文、真下節. 2010. 痛みと情動. *Pain Research*, 25, 199-209.
- ・ 成田和信. 2008. 快さについて. 『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』, 23, 1-21.
- ・ 成田和信. 2010. 快楽と楽しさ. 『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』, 25, 1-29.
- ・ Nozick R. 1974. ノージック. 『アナキー・国家・ユートピア』. 嶋津訳. (原著は *Anarchy, State and Utopia*. Blackwell.)
- ・ 大石繁宏. 2009. 『幸せを科学する』. 新曜社.
- ・ Parfit D. 1984. デレク・パーフィット. 『理由と人格』. 森村訳. (訳は 1998.) 勁草. (原著 *Reason and Persons*. Oxford.)
- ・ Parfit D. 2011a. *On What Matters vol.1*. Oxford.
- ・ Parfit D. 2011b. *On What Matters vol.2*. Oxford.
- ・ Pianalto M. 2009. Against the Intrinsic Value of Pleasure. *The Journal of Value Inquiry*, 43, 33-39
- ・ Portmore D. 2007. Welfare, Achievement, and Self-sacrifice. *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 2, 1-28.
- ・ Primoratz I. 1999. *Ethics and Sex*. Routledge.
- ・ Pritchard D. 2010. Achievements, Luck and Value. *Think*, 9, 19-30.
- ・ Pritchard D. 2014. The Value of Knowledge. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. revised 2014.
- ・ Rachels S. 2004. Six Theses about Pleasure. *Philosophical Perspectives*, 18, 247-267.
- ・ Raibley J. 2013a. Health and Well-being. *Philosophical Studies*, 165, 469-89.
- ・ Raibley J. 2013b. Values, Agency, and Welfare. *Philosophical Topics*, 41, 187-214.

- ・ Raz J. 2006. Darwall on Rational Care. *Utilitas*, 18, 400-414
- ・ Rice C. 2013. Defending the Objective List Theory of Well-being. *Ratio*, 26, 196-211.
- ・ Sarch A. 2012. Multi-Component Theories of Well-being and their Structure. *Pacific Philosophical Quarterly*, 93, 439-471.
- ・ Scanlon T. 1998. *What We Owe to Each Other*. Harvard.
- ・ Scanlon T, 2011. How I am not a Kantian. (in Parfit. 2011b. 116-139.)
- ・ Scanlon T. 2014. *Being Realistic About Reasons*. Oxford.
- ・ Scheffler 2010. Morality and Reasonable Partiality. (in Feltham B. et al. ed. *Partiality and Morality*. 98-130.)
- ・ Shafer-Landau R. 2003. *Moral Realism*. Oxford.
- ・ Shusterman R. 1992. リチャード・シュスターマン. 『ポピュラー芸術の哲学』. 秋庭訳. (訳は 1999) 勁草. (原著 *Pragmatist Aesthetics*. Blackwell.)
- ・ Slote M. 2001. *Morals from Motives*. Oxford.
- ・ Sobel D. 2005. Pain for Objectivists *Ethical Theory and Moral Practice*, 8, 437-457.
- ・ Stratton-Lake P. 2004. Introduction. (in P. Stratton-Lake ed. *On What We Owe to Each Other*. Blackwell. 1-18.)
- ・ Suits B. 1978 バーナード・スーツ. 『キリギリスの哲学』. 川谷他訳 (訳は 2015) 原著は *The Grasshopper*. Toronto.
- ・ Sumner L. 2005. Feldman's Hedonism. ( McDaniel et. ali. Eds. *The Good, the Right, Life and Death*. Ashigate. 83-100.)
- ・ Tannsjo T. 2007 Narrow Hedonism *Journal of Happiness Studies* 8 79-98
- ・ Tanyi A. 2010. Sobel on Pleasure, Reason, and Desire. *Ethical Theory and Moral Practice*, 15, 101-115.
- ・ Taylor R.2000. *Good and Evil*. Prometheus.
- ・ Taylor T. 2010. Does Pleasure Have Intrinsic Value ?. *The Journal of Value Inquiry*, 44, 313-319.
- ・ Tiberius V., Plakias A. 2010. Well-being in Doris J.et al. ed. *The Moral Psychology Handbook*. 402-432.
- ・ 上村芳郎. 2003. 『クローン人間の倫理学』. みすず.
- ・ Weijers D. 2011. Hesonism. *Internet Encyclopedia of Philosophy*.
- ・ Wolf S. 2010. *Meaning in Life*. Princeton.
- ・ Zimmerman M. 2007. Feldman on the Nature and Value of Pleasure. *Philosophical Studies*, 136, 425-437.